

マキアヴェルリ「君主論」(マキアヴェルリ)

選集 第一卷)

多賀善彦譯

昨秋以來我國に於てはヨーロッパの狀勢を以て復雜怪奇といふ形容詞をあて、今更の様にヨーロッパの我國に對する態度を非道義的なりとして非難する者も多かつた。しかしこのことは畢竟我々のヨーロッパに對する認識が不充分に起因してゐる。これ等非難者にとつて復雜怪奇に見えるヨーロッパの性格もこれをヨーロッパ自體の立場に立つてその歴史的發展の跡を省みるならば復雜であるにしても決して怪奇でない。現今ヨーロッパに見られる力の政治を理解せんとするならばヨーロッパ近世の國家思想や政治理念の特性を辿つて行かねばならないのであつて、それには十六世紀のイタリア人マキアヴェルリにまで遡らねばならない。したがつて現在ヨーロッパの性格といふもの、眞の認識が我々にとつて不欠缺である以上、その性格の一面を形成するマキアヴェルリ以來の政治理念を究明する事も重要な課題なのである。

かゝる意味に於てマキアヴェルリの著作の重なるものが多賀善彦氏の手によつて邦譯されることになつたのは充分意義のあることで、すでに第一卷、君主論を世に聞はれた。豫告によれば本選集は君主論、ローマ史論二卷、兵法七書附政治論文八篇、フィレンツェ史二卷附小説二篇の六卷よりなり、傳へ聞く所によれば譯者はこれ等諸篇をすでに譯了しておられる由にて我々はその拂はれ

た努力に對して満腔の敬意を表さねばならない。選集にはフィレンツェ史のごとき從來邦譯なき大作があり、政治論文集中には彼の初期の作品があるごときマキアヴェルリの全貌を知る上に意義がある。たゞマキアヴェルリの數多い書簡は人間マキアヴェルリを知る上にも、又彼の思想を知る上にも興味深いものであるからたとへ全書簡は無理としても重要なものだけでも書簡集として一卷を加へられていたらとも思ふが、これは監蜀の願であるかも知れず我々はこれを別の機會に待期することも出来よう。

さて「君主論」についてあるが評者は全篇にわたつて譯者の苦心の跡を辿る餘裕なく、わずかに最初の數章を見たにすぎないので、譯者の苦心を見あやまるおそれなしとしないが、こゝに氣の付いた二三の點について述べさしていただきたい。

譯者は「あとがき」の中で「殊に日常讀 時にはトスカナの方言を驅使して本書を成した原著者の筆致を忠實に傳へるためとりわけ綿密な注意を怠らなかつた」と述べてみられるが、原文との對照によれば譯者が原文の云ひまわしや用語をなるべく忠實につたへ、その範圍で譯文の平明を企圖せられた様子を明に見ることが出来るのであつて往々意譯した方が讀者にわかりやすい様な場合でも忠實に原文の云ひまわしに従つておられるごときその苦心を察すべきである。

たゞ評者に氣の付いた點を述べたことを許していたゞけるならば、例へば第三章中の「風習も壞さないやりにておくと」(八頁)とあるのは *distorme* を *differenze accidentali, esteriori* (*Uiso*

p. 23 註)の意味にとるならば、「風習の違いもないから」とすべきであると思はれ、又同章の他の所に「かういふ風にして異國を強勢極りない國に拵へ上げ」(二十二頁)とあるがこれでは意味が通らな。uno straniere potentissimo はアラゴンのフェルデナンドであるから「勢極めて強き一外國人を(イタリヤに)導き入れ」とすべきであらう。(リシオ、バード註及び本譯二十頁の事實参照)又譯者は *perché* を常に「それといふのも」と譯されてゐるがこれは現代イタリヤ語としては普通のこととそれ自體誤りではないがマキアヴェルリの場合には時に *perció* の譯にすべき場合があるのではないだらうか。たとへばリシオの註によれば、第二章 *フエラ*、公の實例について述べた場合に續く文章に於て(四頁)「マキアヴェルリは、一般論をなしてゐるのであるから、この場合も *perché* を *perció* (だから)の意味に譯し以下の文章を前文の説明の様にせずに一般論の様に譯して行く方がよい様に思はれる、かゝる例はたとへば第九章の中(七十五頁)にも見出されるし、*perché* のかゝる用法はマキアヴェルリのみならず十六世紀の作家に往々見られるものであるから(Cappuccini 辭典參照)リシオの註の様にした方がよい様に思はれる。

尙譯文の平明をはかられるため種々苦心してゐられるが往々あまりに卑近な用語を用ひられたため原意を知るに不適當ではないかと思はれるものもあるが、イタリヤ語でも十六世紀の用法やトスカナの方言などの困難さをもつたマキアヴェルリの主要著作を獨力で邦譯せられた努力に對して我々は心かなる敬意を表さねばなら

らない。

本選集は未だ第一卷君主論を出したのみであつて、ローマ史論兵法論、フイレンツエ史と卷を追ふことにこの選集の意義がいよいよ明瞭になつて來るだらう。第三卷以後如何なテキストによつていられるかは承知しないが、君主論以外の著作には註譯本が少くかつ部分的な場合が多いから譯者の苦心は一更である。譯者がかゝる點を見事に克服されてゐることを期待してやまないのである。(創元社發行、定價一圓六十錢) (鹽見高年)

埃及語小文典

岡島誠太郎著

一七九九年八月歴史上意義深いナポレオン一世の埃及遠征の結果偶然にも發見されるに至つたロセツタ石の出現を契機とし、天才ジャンポリオンの辛苦の解讀により眞に學術としての埃及學が誕生を見たのであつたが、其の後レブシウス、ブルグシュ、ゴドウィン、シヤバ、エマヌエル・ド・ルージェエ及び其の子のジャツク・ガストンマスベロ、ペトリイ等の幾多の英傑が障礙困難を突破し、孜々として研鑽に邁進した爲、埃及學は文字通り日進月歩長足の進歩を遂げ今や歐米諸國いづれも皆埃及學の講座を設置し互に妍を競ふの盛況を呈するに至つた。従つて西洋古代史在來の暗黒面も愈々解明せられ學界の爲に大いに貢獻するに至つた事は既に周知の事實である。

「埃及語に手をつけてから早くも十數年の歳月が經た」と其の自